

西日本新聞 1995.4.5

命の火を燃え立たせた赤 命の輝きを描く

齋藤真一の絵に惹かれたのはいつのことだったろうか。彼の名前を聞いただけであの朱に燃える太陽の色を思い出す。それは自分が見たその時々、茜に染まる色に重なる。幼い頃寺の境内で見た夕日であり、九重高原に沈む夕日であり、北国カナダの地平線に沈む夕日であったりする。

齋藤の絵に「紅い陽の道」というのがある。瞽女さんが太陽に向かって歩いている絵で、濁りのない澄んだ赤が心に沁み込んでくる。私は長い間、それが夕日の赤だと思っていたが、齋藤はそれが朝日だといっている。一点の曇りもない明け方の太陽だと。しかし、それは結局どうでもいいことなのだ。人は誰でも自分のなかにいろいろな色の記憶を抱えて生きている。齋藤はいう。「瞽女さんからいろをもらった」と。

六歳の時失明した杉本キクエさんには、何十年たってもはっきり見える色がある。越後の高田平野に沈む夕日の赤だという。盲目の杉本さんからその話を聞いた齋藤は、杉本さんの心のキャンパスに描かれたその赤を描いてみようと思ったのだ。それがいろをもらうということだった。齋藤は瞽女さんから数えられないものをもらっている。「人生にはさすらいがあって出逢いあり、愛が生まれ、やがて離別があり、祈りがある、そして彼岸があるのだと信じている。この、人生の大きな鉄則を知って生きてゆかないと、とんでもない間違い起こすことになるのではないかと思っている」(「大法輪」1977)この考えこそまさに齋藤が十年もの間瞽女さんとともに歩いて知った人生哲学なのである。

齋藤が描こうとしたのはそんな、人が心の中にひそかに抱えている色の記憶の風景名であり、命の輝きである。だからこそ、齋藤の絵に自分の生き様を重ねてみるができるのだ。現在の私が齋藤の赤に重ね合わせて見えるのは、何だろう。記憶の中で燃え続ける赤であり、生命を生み出す女たちが流し続ける血の赤である。

生涯自分探しの旅

齋藤はいう。絵の中に描きたいのはエロティシズムだと。瞽女さんの生き方に見たエロティシズムは悲しいばかりに澄んだエロティシズムである。

瞽女さんは、越後の村から村へ旅を続ける盲目のさすらい人、日本のジプシーである。独自の規範の下に生き、家から家へ陽の温もりを贈り届ける語り部であった。

失われてゆく古い美意識について語るのはたやすい。日々の暮らしの中で自分自身の心の奥底

に燠火のように燻り続けているものと同じくらいに。匿し持っているエロスへの憧憬、セクシュアリティへの渴望を、心の奥深く塗りこめて生きていることも。しかし、齋藤がいうように人が根源的に求めているものがエロティシズムであるのなら、それを覆い隠すことができはしない。カサカサと乾いた心からは人の心を打つ何も生まれてくることはないのだと、齋藤の絵は語りかけてくる。何かに心の芯まで浸って生きることなどできない私は、このようにつかの間、絵や映像の世界を通して非日常の世界に入り込み、癒されることのない渴望に目覚める。そしてそれを詩に書いてみたりしてはまたそっと塗り込めるという、手すさびのような日常を繰り返しているのである。生涯自分探しを続けた放浪の旅人、齋藤真一のような生き方を羨望しながら。

田島安江